

〔新刊紹介〕

松本孝三・花部英雄編

『語りの講座 昔話への誘い』

黄地 百合子

本書は、國學院大学の平成二十年度オーブンカレッジ特別講座「語りの文化講座 昔話の学び—その歴史・民俗・世界—」の内容をまとめたものである。平成十四年から続くこの講座では毎年、昔話とその周辺の様々な姿を多彩な講師陣が講じてきた。

昔話は長らく口承によって伝えられてきたものだが、日本ではこの数十年の間に、その伝統的な伝承のあり様が急速に終焉に近づいていると言われる。そんな状況の中で編まれた本書からは、昔話世界の奥深さと豊かさ・広がりを確認する研究者たちの、新たな挑戦が感じとれる。

最初の章「昔話と神話・説話・物語」では、まず青木周平氏が「浦島太郎と海幸・山幸神話」と題して遙か古代から中世を経て近現代へとつながる浦島譚について述べ、小峯和明氏の「宇治拾遺物語」と昔

話」は、「瘤取り爺」等を取り上げて中世説話として書き留められた昔話を様々な角度から照射する。そして小林幸夫氏（本会会員）の「西行法師と「うるか問答」——鮎の狂歌咄——」は、昔話の中で語られる西行の意外な姿を通して狂歌咄の伝承に迫り、徳田和夫氏は「お伽草子と昔話」で「ねずみ物語」を中心に民間説話と古典文学の交流の新たな一面を講じている。

第二章「異文化の昔話」では、松本孝三氏（本会会員）が「南島の民間説話——創世譚の周辺——」で、真実に傾斜した神話的とも言える南島の昔話の諸相を明快に説き、中川裕氏の「ウエベケレ——アイヌの散文説話——」は、アイヌの昔話がアイヌの伝統的世界観そのものを語ることを述べる。また三原幸久氏は「ラテンアメリカの昔話」で、スペインから伝わった話をラテ

ンアメリカの先住民の人々が独自の要素を加えて変容させた様を明らかにする。

第三章「昔話の歴史と民俗」においては、田中宣一氏が「昔話と民俗」で「宝化物」などの話を例に昔話に込められた民俗の心意を具体的に講じ、花部英雄氏は「昔話の研究史——「桃太郎」を中心に——」で、江戸期以降の昔話研究の流れをたどりつつ新しい視点の必要性を語る。最後に石井正己氏は「昔話と近代」と題し、「遠野物語」の話者で『聴耳草子』を編んだ佐々木喜善の再評価を通して、昔話を後世に伝えていくための原点を訴えている。

昔話を核としながら昔話世界を取り巻く多様な文化に言及する本書は、昔話の多角かつ総合的な探求が多くの新しい可能性に満ちていることを、改めて教えてくれるものと言える。

（三弥井書店 二〇〇九年八月 二六五頁
本体価格二五〇〇円）

（おうち・ゆりこ 本会会員）